

ジュニアからオリンピックまで 多様性のある和歌山のセーリングシーン

地元セーラーのディレクションでお届けする「JSAF水域紹介シリーズ」、
今回はナショナルトレーニングセンターを擁する和歌山県。
多様なセーリングの形が見られる水域です。

和歌浦フィッシャリーナ

和歌山マリーナシティヨット倶楽部

和歌山マリーナシティ

和歌山セーリングセンター

(ナショナルトレーニングセンター)

南紀スポーツセンター海洋スポーツ施設（田辺市）

新宮市エリア

県連のおいたち

和歌山では1971年に開催された「第26回和歌山国体」（黒潮国体）に前後して、高校、大学、実業団にヨット部、そしてレーザーやシーホッパーのフリートができ、一気に競技人口が増えた。国体のために和歌浦漁港に建設された青少年海洋訓練所がその活動の拠点となった。

この頃からクルーザーヨットも増え始め、漁港内にフィッシャリーナとして桟橋が整備され、ディンギーからクルーザーまで活動できる環境が整った。クルーザーの和歌山オーシャンヨットクラブも県セーリング連盟に加盟し、以来、大小様々な艇による活動がつづいているのが和歌山の特徴だ。また和歌浦漁協はじめ地元の漁師の方々とも良好な関係を築いてきた。

県連にとってエポックメイキングとなったのは94年8月の「レーザー級世界選手権大会」（マスターズワールド、ラジアル、ウイメンズ）。和歌山マリーナシティで行なわれた「JAPAN EXPO世界リゾート博」のスペシャルイベントとして開催された。和歌山のような小さな県連が、各クラブのメンバーやOB、そしてクルーザーヨットの愛好家などを結集し、また

地元漁協の協力を得ながら、長期間の大会を成功させたことは県連にとって貴重な経験となり、その後の県連の方向性を決定づけた。

博覧会終了後、大会会場は第3セクター経営のハーバーに生まれ変わり、99年3月、艇庫建設も決まり、県連が和歌浦漁港から和歌山マリーナシティに本拠地を移した。

この頃からシドニー、アテネ五輪のレーザー級代表の鈴木國史選手やアテネ五輪470級代表の吉迫由香選手、佐竹美都子選手のようにマリーナシティを拠点に世界を目指すトップアスリートが集り、地元の熱意も高まり、和歌浦の海が世界で戦う選手を育て始めた。

また、2006年からは鈴木國史が代表をつとめるNPO法人「和歌山セーリングクラブ」が指定管理者としてハーバーを管理、運営するようになり、それに伴い星林高校ヨット部と和歌山大学ヨット部が活動の拠点を移した。そして、08年には文部科学省からセーリング競技のためのナショナルトレーニングセンターの認定を受け、「和歌山セーリングセンター」は和歌山のセーリング拠点から日本のセーリング拠点へと歩み始めた。（和歌山県連理事／山口慶一）

和歌山セーリングセンターのスロープ



NTC となった和歌山セーリングセンターの艇庫



NTC 専用艇庫の内部（写真上）とトレーニング機器

【NTC誕生】

トップレベル競技者の強化、優れた素質を有する競技者の発掘、育成など我が国の国際競技力向上に向けた組織的、計画的な取り組みをスポーツ医科学、情報の側面から支援する中核機関として東京都北区に国立スポーツ科学センター（JISS）が設立された。そしてアテネオリンピックの好成績を受け、北京オリンピックに向け2008年1月にJISSに隣接してナショナルトレーニングセンター（中核拠点）が新設された。

その後、中核拠点で対応できない冬季競技、海洋、水辺競技および高地トレーニング等の競技については既存のトレーニング施設を活用することになり、各競技団体の育成、強化活動の実情を踏まえて競技別強化拠点を指定し、中核拠点に匹敵する高度なトレーニング機能を持たせることになった。これを受け、JSAFの調査、審査、推薦を経て「和歌山セーリングセンター」がセーリング競技のNTC競技別強化拠点として2008年5月に文部科学省から指定を受けた。

現在、JSAFと県連、そして運営を担当するNPO和歌山セーリングクラブがジュニア、ユース向けの練習艇（OP、レーザー、420、29er）やサポートボートの配備を進めている。



ナショナルトレーニングセンター（NTC）を擁する和歌山

1

【NTC施設紹介】

NTCは和歌山マリーナシティの北西エリアに位置する和歌山セーリングセンターに設置し、NPO法人和歌山セーリングクラブが文部科学省から委託を受けて運営している。

ここではセーリング競技のための施設の高機能化がすすめられ、現在はJSAFオリンピック特別委員会と連携しながらレガッタや強化合宿の開催からセーリングのための情報収集や解析、ナショナルチームやその候補選手の練習などに活用されている。

和歌山セーリングセンターは、08年12月に完成したNTC専用艇庫と一般用艇庫、150隻程度の陸置きヤード、スロープ（18m常設、10m移動式2基）、運営やサポートボート専用のポンツーン、クラブハウスなどで構成されている。

NTC専用艇庫は高さ13mのシャッターで開閉され、スター級や49erでもマストを立てたまま収納が可能で、2階部分には海上練習の合間に利用できるようトレーニング設備も整っている。

【JSAF合宿】

和歌山セーリングセンターではNTC事業としてJSAFオリンピック特別委員会や各クラス協会と連携し強化合宿を企画、実施している。中心となるのが次世代を担うユース、ジュニア選手の育成、強化事業で、全体合宿は冬休みと春休みに実施し、代表選手の選考も行われている。

合宿ではセーリング技術の習得だけでなくセーリングに必要な体力の向上を目指した体力測定やトレーニング、ドーピング、栄養、ルールなどの講習も実施されている。



ユースの合宿風景



「プールでOPPI」は小学校と連携して行われた

【セーリングの普及、地域住民に寄与する事業】

トップアスリートばかりが対象ではない。「和歌山の子供たちは誰でもヨットに乗れる」を目指して普及活動も行っている。小中学生を対象にした体験会、和歌山大学でセーリング体験授業、ランドヨットによる学校の校庭でのセーリング体験、そして09年6月には小学校と連携して学校のプールでのセーリング体験「プールでOPPI」も行った。



ゴールデンキッズ発掘プロジェクトの1シーン

【和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクト】

和歌山県内の小学生を対象に、体力、運動能力が特に優れた子どもを発掘し、育成プログラムを実施し、将来、オリンピックをはじめとする国際舞台で活躍できる競技者を和歌山県から輩出することを目的として07年から実施され、毎年40人前後を選抜し、育成している。

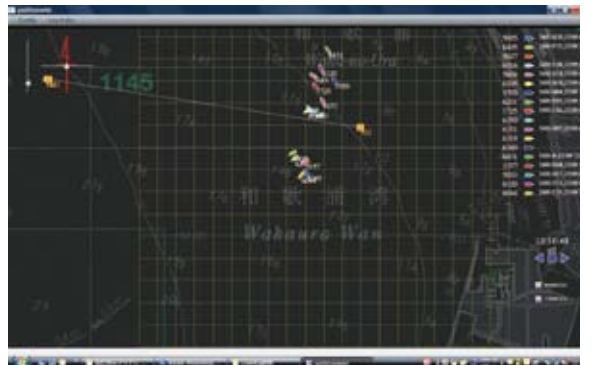
09年度は1期生（小6）の中からセーリングを志す子どもたちを受け入れ、まずはJOCジュニアオリンピックカップ出場を目指し練習に励み、目標を達成した。10年は対象者が中学生となることから、より専門的にセーリングに取り組んでいく予定だ。2期生、3期生にもセーリング体験を実施し、セーリングで能力を発揮できる子どもたちの発掘、育成を継続的に行っていく。

【GPSを用いた艇位置情報システム】

NTCではセーリング競技を視覚的に捉え、コーチから選手へのフィードバックに役立てるためにGPSを用いた艇位置情報システムを和歌山大学システム工学部と連携し開発を進めている。

このシステムは艇に搭載したGPSモジュールからの信号をサポートポートで受信し、風向風速情報とともにリアルタイムで視覚的に分析し、すぐに選手にフィードバックしようというもので、感覚的だったセーリングを数値的に考えようというものがある。

このシステムを用いることでNTCで艇の動きをリアルタイムで見ることができ、コンピュータグラフィックスでレースを俯瞰映像として観戦することも可能となる。高校総体や国内初のメダルレースでも映像が提供され、陸上に待機する関係者の歓声が聞かれたことは言うまでもない。



CGで見られるレース映像

【スマートシステム】

言葉では伝えにくいセーリングテクニックもビデオを見れば「一目瞭然」というニーズに応えようと、国立スポーツ科学センター（JISS）が開発をおこなっている映像データベース（SMART System）をJSAFオリンピック特別委員会とNTCがこの春にも稼働させる。

このシステムを用いれば、登録されたJSAFメンバーがどこからでもパソコンを用いてオンデマンドで必要な映像データを閲覧できる。艇種別やテーマ別にコンテンツが整理され技術的なものからおもしろい映像まで準備が進められている。つまりセーリングのための映像図書館というべきものになる。レースの模様の公開やルール解説などにも用いる予定で、手持ちの「お宝映像」があればNTCまで一報いただきたい。



セーリングのための映像図書館となるスマートシステムの画像



ジュニアセーラーのためのJSAFシーマンシップアカデミーも開催された

2 和歌山県で活動するクラブ

和歌山のセーリングシーンはジュニア、高校、大学、社会人の数々のクラブによって支えられている。



スロープで勢揃いする星林高校ヨット部



〈シエスタ〉チームはJ24クラスで活躍

●和歌山ジュニアヨットクラブ／B & G和歌浦海洋クラブ

小中学生を中心としたクラブで、OP級を中心に活動している。セーリング普及を目指し親子で海を楽しむB & G和歌浦海洋クラブ、全日本選手権などを目指してレベルアップを目指す和歌山ジュニアヨットクラブが連携して活動している。

●和歌山県立星林高校ヨット部

県内唯一の高校ヨット部である星林高校ヨット部は長い歴史の中で多くのセーラーを輩出してきた。現在は部員不足に悩んでいるが、国内最高レベルのセーリング環境の中で大きく飛躍してくれることを期待している。

●和歌山大学ヨット部

和歌山に来たのだからヨットをやろうという学生が少なくない和歌山大学ヨット部。2009年（平成21年）からは経済学部で国立大学としては珍しいスポーツ推薦入試を実施し2人の優秀な選手が入学した。古豪復活を目指し和歌山セーリングクラブのサポートを受けながら練習に励んでいる。

●和歌山県立医科大学ヨット部

学業を最優先にしながらも、同好会として活動を続けセーリングを楽しんでいる。毎年OB戦を実施しており、現役生とOBでクラブを維持している。

●和歌山オーシャンヨットクラブ (WOYC)

和歌浦の海をこよなく愛し、老若男女セーリングを楽しむクルーザーのクラブで、月に1回はクラブレースを実施している。また紀伊水道を挟んだ徳島ヨットクラブとは1977年（昭和52年）から毎年クラブ対抗レースを実施している。国内最古のクラブ対抗レースではないだろうか。

●和歌山マリーナシティセーリングクラブ

和歌山マリーナシティヨット倶楽部を拠点に集うクルーザーセーリングクラブで、和歌山だけでなく近隣府県の方々が集まってクラブレースを楽しんでいる。

●日吉染業ヨット部 〈シエスタ〉

世界を基準に闘っているチームで、J24クラス〈シエスタ〉はマッチレース等でも数々の成績を残している。

●島精機製作所ヨット部

2003年ラッセル・クーツ氏を招いて始まったSHIMA SEIKI CUPのホストクラブ。レース後に行われる盛大なパーティのホストとしても活躍。クルーザーヨットを中心に、470級でも活動している。

3

和歌浦の海の主なレース

美しい海と西寄りの風が年中吹いているセーリングに最適な和歌浦の海では、毎年いずれかのクラスの全日本選手権が開催されている。また、下記のレースが毎年開催されているので、JSAF メンバーも一度は和歌浦の海を楽しんでいただきたい。

●JSAF 和歌山国際ナショナルレガッタ

NTCでのメインレガッタとして2008年度から始まった。オリンピッククラスを中心に行われる国際レースで、昨年は日本初のメダルレースも行われた。2010年は10月8日から11日に予定され、翌週に開催される江の島オリンピックウィークと連戦するナショナルチームが多い。

●和歌山コールドカップ

今年23回を数える真冬のレース。当初はレーザーやシーホッパーが中心だったが、現在はOP級を中心に毎年2月に開催されている。和歌山といえども冬は寒い。冷たく重い風がセーラーを迎えてくれる。

●これまでの国際レガッタ

94年のレーザークラス世界選手権、03年は国際14クラス、そして09年はレーザークラスの世界選手権が行われ、いずれの大会も大成功を収めている。このような大会を通じて県連メンバーの運営スキルが大きく高まったと言える。



インターナショナルレガッタにはナショナルチームも多数参加する



今年で8回目を迎える SHIMA SEIKI CUP (写真/山崎武敏)



第70回国体開催に向けて

15年、和歌山では2順目の国体を開催することになった。すでに和歌山県には準備セクションが設置され、和歌山セーリングセンターと和歌浦の海で最高の国民の祭典を繰り広げべく県連も動き始めた。

1971年に開催された1順目の和歌山国体

4

和歌山県内のセーリングエリア

県連の活動は和歌山セーリングセンターが中心となるが、そのほか県内各所でセーリングを楽しんでいるエリアがある。和歌山県は延長650kmにもなる海岸線があり、美しい海と景色は最高のクルージングスポットでもある。



和歌山のセーリングの発祥の地と言える和歌浦漁港

●和歌浦フィッシャリーナ

和歌山のセーリングの発祥の地と言える和歌浦漁港は早くからプレジャーボートが安心して使用できる漁港で、現在も地元漁協の理解のもとフィッシャリーナとして整備され、クルーザーヨットが多く係留されている。和歌山オーシャンヨットクラブの本拠地でもある。

また、新宮エリアなど和歌山県内各所でクルーザーヨットを中心とした活動が行われている。



●南紀スポーツセンター海洋スポーツ施設

海上係留のクルーザーヨットと艇庫、スロープが整備されており、田辺市におけるクルーザーの拠点となっている。